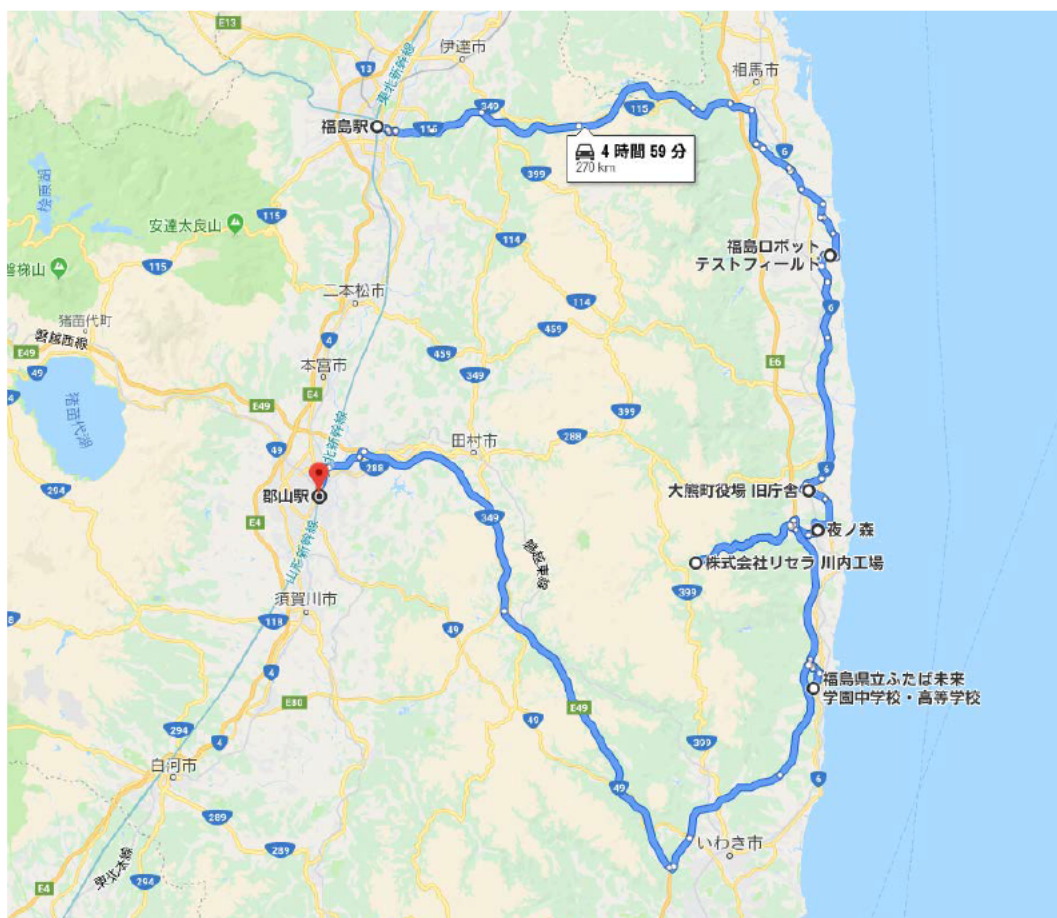


## 福島県現地調査結果報告【中田俊彦委員報告資料】

- (1)実施日：令和元年10月4日(金)
- (2)訪問先：福島県 南相馬市、大熊町、富岡町、川内村、広野町
- (3)参加者：伊藤委員長、岩淵委員、中田俊彦委員、中田スウラ委員、若菜委員
- (4)行程：
- ① 南相馬市  
福島ロボットテストフィールド視察
  - ② 大熊町  
大川原地区視察・町との意見交換
  - ③ 富岡町  
特定復興再生拠点夜ノ森地区視察
  - ④ 川内村  
株式会社リセラ川内工場視察
  - ⑤ 広野町  
福島県立ふたば未来学園視察



## (5) 結果報告:

### ① 南相馬市

#### 福島ロボットテストフィールド視察

視察先概要: 福島イノベーション・コースト構想に基づき整備される、陸・海・空のフィールドロボットを主対象とする研究拠点。本年度末に全面開所を予定。

- 中村事業部長からの説明の概要は次のとおり。
  - インフラ点検・災害対応エリア、水中・水上ロボットエリア、無人航空機エリアがあり、21 施設中 11 施設が開所、20 年 3 月までに全施設の開所を目指している。
  - 現在、浜通り地域でロボットの研究プロジェクトが 51 件始動している。43 の会社団体が、震災以降、新たに拠点を設けている。
  - ロボットテストフィールド印のお饅頭やメカハイボールなど、地元企業と南相馬市が手を組み、市を挙げて「ロボットの町南相馬市」として PR している。
  - 工業の誘致などの産業集積についても取り組んでいる。ロボット拠点を作っていくことで、(その部品などの発注を目的として) 地元企業との取引を積極的に拡大していきたい。
  - ロボット関係者が集まって新しいイノベーションを創出し、世界に貢献。福島復興のエンジンとしてけん引できるような存在になれるように引き続き頑張っていきたい。
  
- 門馬南相馬市長からの説明の概要は次のとおり。
  - 南相馬市は地盤が良いので地震の被害はあまりなかったが、津波では 636 人が一瞬で亡くなってしまった。海外の防波堤を 1m かさ上げし、防災林を 200m 幅で植えた。これらの作業はこの 10 年間で順調に進んできた。
  - 原発の被害も大きい。市の 3 割のエリアに避難指示が出た。6 月現在は 60,036 人の住民登録が出ており、実際に住んでいる人は 54,639 人となっており、5,400 人ほどが未だ市外に避難している。市内の年齢人口を見ると、若い層が明らかに減った。
  - 田んぼを工業用地にして、雇用の創出を目指し、そのうちの 50ha をロボットテストフィールドに入ってもらった。若い人が研究の場として集まってくるロボットテストフィールドをどう活用していくか。ここで若い人たちが研究の結果、南相馬で事業を始めたいことを期待している。
  
- その後、施設を視察しつつ質疑を行った。



中村事業部長からの説明



施設の視察

### ➤ (所感)

・沿岸区域が津波に浸水後、土地用途を農地から工業地域に変更して、就業者の増加と地域経済波及効果を狙っていることがわかった。人口減少の不可避な南相馬市の、将来への切り札の一つとして、市長の強いリーダーシップを感じた。

・テストフィールドがおおむね完成すると共に、関連団体の入居もはじまったばかりである。国内初の大型のテストフィールドの運用方策、とくに知財が関わる利用団体への守秘義務と、地域社会への公開や交流の機会提供等、新たに模索を重ねつつ着実に進捗することを期待したい。

・隣接して、大型の石炭火力発電所からの高压送電線が施設されているので、とくに「空域」のテスト時には注意を要することなど、特殊な用途ゆえに設備運用にあたって多様な環境配慮が求められている。

## ② 大熊町

### 大川原地区視察・町との意見交換

視察先概要：大熊町の先行復興ゾーンとして整備。本年4月に新しい町役場庁舎が開庁。

➤ 町役場庁舎において復興の状況等について説明をいただいた後、町との意見交換を行った。概要は次のとおり。

- 庁舎の開庁式を4月14日に行い、5月7日から業務を開始した。
- 放射線量については、福島第一原発の近くの高いところで  $10 \mu\text{Sv/h}$  くらい、庁舎周辺で  $0.15 \sim 0.5 \mu\text{Sv/h}$  くらい。特定復興再生拠点内については、これから除染を行うことになるが、国道6号周辺で高いところで  $6.0 \mu\text{Sv/h}$  くらい。
- 町民にもいろいろな思いがあり、一家の中でも意見が分かれる。多様なニーズにどうこたえていくか、

一概には言えないが、長い目で見てふるさとに戻りたいという人に戻ってもらえる環境づくりを進めたい。

- 大川原地区の住宅に入居した人は高齢者が多い。子どもが学校に通っている人、避難先で仕事を始めた人が帰ってくるのは難しい。最終的に、例えば子どもが独立した後に戻りたいという人が帰ってこられるよう、町の維持、新たな産業の入れ込みを考える必要がある。また、廃炉作業等で遠くから通っている人が根付いてもらえるような環境も整えたい。



大熊町からの説明



意見交換

### ➤ (所感)

・避難指示が解除された大熊町大川原地区にて、移転した町役場新庁舎を拠点とする街づくりと、周囲に広がる住宅など生活環境の整備状況を体感した。福島県浜通り相双地区のなかで、双葉町に次いで避難解除が遅かった。

・従前の、常磐線大野駅前の街区から、放射線量の低い郊外地域に街の拠点を移転した、苦渋の選択である。駅東の広大な地域は、中間貯蔵施設の工事が進んでいる。

・駅から離れた大川原地区と鉄道駅とのアクセス、買い物、医療、学校など、試算の難しい住民帰還者数と年齢層を想定した、インフラ整備が続く。

・先行する、広野町、楡葉町、富岡町、浪江町に比べると、住民の帰還率は一桁であり、楽観視できない。常磐線をフクイチに向けて一駅移動する毎に、3-5年の復興時間差を感じる。とくに、大熊町、双葉町は、抱える悩みがとくに深刻であろう。

### ③ 富岡町

特定復興再生拠点夜の森地区視察

視察先概要：福島復興再生特別措置法に基づき策定された計画において、富岡町の特定復興再生拠点として位置づけ。

- 高橋副町長等にバスに同乗いただき、町内を移動しつつ説明をいただいた。また、夜ノ森駅建設予定地で下車し視察を行った。概要は次のとおり。
- 平成 29 年4月に町内の一部を避難指示解除、帰還開始から2年半が経過する中、町居住者は、1100人余り。人口構成は高齢者が30%で県平均に近い、15 歳以下の年少人口が4%。帰還者と新町民の比率はおおむね半々であり、双方にとって住みやすい町となる復興を目指している。
  - 太陽光発電事業が町内で盛んである。メガソーラーを 3 か所に設けて70メガワットを発電。送電網が充実しており、22,000 世帯に供給しているので一大供給地と言える。
  - 国道6号は基幹道路だが、除染及び建物解体等で大型トラックの通行量が多く、朝方は既に 5 時から8時半頃までの渋滞が激しいので、高速道路の四車線化を望んでいる。現在6号は、特別通過であり、一般歩行や車両も二輪車は禁止である。
  - 富岡町においては町のシンボル、町民の心の支えになっているのが桜。メインとなる桜通りは、震災直後からモデル除染事業を実施。今年バスによる車内花見を実施して900人が参加した。繰り返し除染をしたのできれいになっている。震災前は花見客は13万人だった。健康増進センターなどの利活用も含め、健康をイメージした復興の絵姿を描こうとしている。



夜ノ森駅建設予定地視察

➤ (所感)

・先に視察した大熊町に比べて、生活の息吹を感じる。ただし、2013年4月に視察した際の、富岡駅や街区の荒廃を思い出すと、景観の大きな変化と復興の歩みを実感する。富岡駅までの常磐線の復旧も後押ししている。

- ・桜並木で著名な夜ノ森駅は、まだ鉄道不通地区で、住民の避難指示が継続中。2020年3月の避難指示解除と鉄道復旧が、地域の街づくりを大きく後押しすることを願いたい。
- ・町内の富岡地区が、拠点として先に復興して、これから始まる夜ノ森地区の街づくりを支える役目として機能することが期待できる。

#### ④ 川内村

##### 株式会社リセラ川内工場視察

視察先概要：川内村の田ノ入工業団地進出第一号として、昨年より操業。衣料品等を製造。

- 角南工場長より、工場内を視察しつつ説明をいただいたあと、遠藤川内村長及び工場長と意見交換を行った。概要は次のとおり。
  - 裁断から出荷まで、内製化して行っている。また、カンボジア等から実習生に来てもらっている。
  - 当初に比べ、宅配業者に集荷に来てもらえるなど、物流の改善は進んでいる。
  - 今後の企業進出に向けて、労働力の確保が課題。企業立地補助金は、地元の雇用の確保が条件になっている。一方、除染等の単価の高い仕事があるため、製造業の求人に手を上げる人が少ないなど、職種によるミスマッチが発生している。
  - 廃炉作業員のヘルメットを作るなど、地元にも貢献してもらっている。



工場内視察

#### ➤ (所感)

- ・製品の出荷、および段ボール箱など梱包資材の調達に不可欠な、貨物輸送(ロジスティクス)の制約が、本業の操業に大きな影響を及ぼしてきたことを実感した。現在では、ほぼ解決できているとはいえ、民間の運

送事業者のサービスエリアと輸送頻度の向上は、被災地共通の課題である。

・競合の激しいアパレル事業において、スポーツフィットネスウェアやメディカルサポート用品など、付加価値の高い製品に焦点を定めて、岡山の本社を営業拠点として受注を進めている。

・経済活動の原点となる、ヒト・モノ・サービスの環境をバランス良く整えることが、企業誘致の基本となる。クラスター構想など、分野の近い産業が集積すれば、相互にそれらを補完することが可能となり、単独立地よりは優位になるだろう。

## ⑥ 広野町

### 福島県立ふたば未来学園視察

視察先概要：平成 27 年度開校。本年度より、高校が現校舎に移転するとともに中学校が開校し、併設型中高一貫校となる。

➤ 丹野校長及び南郷副校長からの説明の概要は次のとおり。

- 80%の生徒が双葉郡出身で、被災を経験した。双葉郡内の高校が現在休校の中、ふたば未来学園が開校。
- 中高一貫教育、アクティブラーニング等を取り入れた教育を柱にしている。現実社会の中で、「変革者」として必要な資質・能力を学ぶことが目標であり、具体的には、学校教育の中で育成すべき資質・能力として「ループリック」を作成している。
- アカデミック系列、トップアスリート系列、スペシャリスト系列の3コースがある。選択科目が多いこと、探求学習があることが教育課程の特徴。例えば、復興の課題を見つけ、演劇にする授業や、課題を踏まえて更なる探求と実践を行うゼミ、地域での学習のみならず、世界への発信を目的とする海外研修も行っている。
- 平成 31 年 3 月には新校舎が竣工、地域協同学習を行うための多目的スペースやカフェも設置した。

➤ 意見交換の主な内容は次のとおり。

- 新設された中学校では、国語・数学の授業を増やし、グローバルスタディ(英語の授業、海外研修も予定)、探求学(未来創造学)、シティズンシップ教育(哲学の授業や演劇)を柱に取り組んでいる。
- 先生の考え方を一致させるため、企画調整開発部が主体となってカリキュラムを編成し、それに沿ってやっている。何を目指すべきかを示すためにループリックを作っており、今や福島県の高校の先生が本校に集まって研修したり、他県の方も視察に来られている。
- 被災から年月が経つ中で、授業で行う演劇の中でも、当初は重いものを取り扱うものもあったが、今

は前を向いてやっ払いこうとするものが多くなっているように感じる。

- これからの課題としては、協働している NPO 法人は緊急スクールカウンセラー等派遣事業によるものであるため、その継続支援をお願いしたいというのが一つ。もう一つは、中学校においても海外研修を実施するための支援をお願いしたい。



学園からの説明

#### ➤ (所感)

- ・昨年 10 月の旧校舎の視察に続いて二回目である。新築の校舎は、ゆるやかな円弧が美しく、中心のカフェ周囲の洒落た雰囲気は、公立学校とは思えない程、新鮮である。落ち着いた勉学環境を確保できたことに、安堵する。広野駅から徒歩通学圏内であるのも良い。
- ・独自のカリキュラム編成とルーブリックの評価指標導入に伴う、教員の意識改革と、教員の人事異動に伴う継続性など、固有の課題に立ち向かっている。生徒よりも、教員のほうが学ばねばならない、と感じる。
- ・放課後の補習をNPO法人カタリバに委託して、効果を上げている。カタリバは、2017 年 9 月の宮城県視察時に、女川尚学館にて出会ったことがある。
- ・大学への進路目標が、進学コースは難関大学指向であったので、多様なライフプランに向けた高等教育の選択肢の提供もあってよいだろう、と意見交換で話題になった。
- ・自由学習として、エネルギー教育も手がけているので、お手伝いしたい旨を先方に伝えた。

#### その他

- ・国道 6 号線の朝夕の渋滞は酷いと聞いていたが、実感することになった。帰途利用した常磐自動車道は、広野インターからいわき四ツ倉インターの区間で、帰宅時の渋滞にあい、15 分程度遅延する。一般道も、高速道路も渋滞する日常は、けっして快適ではない。住民数は減っているが、工事関係者や中間貯蔵施設の搬入など、独自のニーズによる交通の負荷は高まっている。とくに、いわき市内を拠点として、相双地域と毎



日往復する業者は多いようだ。せめて高速または国道を片側 2 車線に増やすなどして、地域内の移動の障壁を取り除くことは意義があるだろう。